

I 学校の概要

学習意欲向上モデル校事業

高松市立協和中学校

◆生徒数及び教員数

○生徒数

第1学年	第2学年	第3学年	特別支援	全校
7学級 211名	6学級 207名	6学級 195名	2学級 5名	21学級 618名

○教員数 41名

◆学校の特徴

本校生徒は、様々な負荷を背負っている生徒が多い。そのため、全国、県のいずれの学習状況調査も、自分への自信や将来の夢や目標への努力といった、自尊意識や自己肯定感にかかわる値が低い。また、これに起因する生徒指導上の課題は大きいものがあり、その影響が学力や進路にでている。

そこで、本校ではかつてより人権教育を基礎とした「なかまづくり」を通して、互いに支え合う力の育成を行ってきた。これにより学校は、以前に比べれば落ち着いたものとなってきているが、まだまだ十分とは言えず、集中して学習に取り組めなかったり、授業中に居眠りや私語をしたり、他のことをしたりする生徒など、いわゆる「学習からの逃避」が依然として本校の中心的課題である。

II 研究主題等

研究主題 みんながもれなく「学び合う」授業づくり
～協同学習による学習意欲の向上～

◆研究主題設定の理由

本校の実態から、生徒一人一人の進路を保障し、将来へと希望をつなげていくには、生徒指導と相まって日々の学習指導における授業の充実がとても重要である。生徒が教室にとどまり、授業中に寝ず、授業に集中すれば、学力も向上し、進路選択の幅も拡大し、将来への展望も開けてくる。

そこで、生徒が教室で授業を受けたい、もっと知りたいと思える学習指導にしていく取組が不可欠である。そのためには、これまでの教え込みの学習のみでは不十分であることを踏まえ、協同学習の基本的な考えである、生徒同士の教え合う・聴き合う関係性を重視した授業への改善によって、授業の持つ生徒指導の機能向上も高め、生徒自身の学ぶ意欲を高めたい。これにより、生徒を教室にとどめ、学ぶ機会を公平に保障し、さらにはすべての生徒の進路獲得の第一歩にしたいとの思いから、標記の研究主題を設定した。

◆研究内容及び方法

知識の多い教師が、教科書に記された知識を生徒にかみ砕いて分かりやすく説明する授業。このような教師から生徒へと一方向に説明する指導では、学ぶ意欲の向上につながらないことが多い。様々な家庭環境で育った生徒たちで構成される学習集団には、たとえ1時間でも一方的な説明中心の授業は苦痛であり、まして6時間も耐えられない生徒がでてくるのは当然である。教師は、生徒が座席に座っているのが当然と考えがちであるが、間違っている。自戒すべきである。また、説明的な授業では助け合う場面も乏しく、分からないところを何とかしようとする意欲や姿勢も育ちにくい。そこで、授業を「生徒が学びを実感できる授業、生徒の学ぶ意欲を喚起・持続・向上させる授業」に日々の授業を転換していくために、生徒が「学び合う」授業へと転換させたい。そのために必要な研究内容及び方法として、次の3点を中心に行うこととした。

(1) 学習意欲を高める授業改善

① 質の高い学習課題の考案・蓄積

ア 二段構えの学習課題の効果を検証する

学力の下位層ももれなく達成させる「共有の課題」と上位層も下位層も公平に取り組める「ジャンプの課題」を設定し、「易」から「難」へと学習させることで、生徒の学習意欲の維持・向上につながると仮定して実践している。しかし、実際、授業中の生徒の意欲化にどのような影響を与えているのかについて明確でないことから、実践授業と生徒及び教員に対する協同学習アンケートや生徒の授業評価アンケートの結果をもとに検証する。

イ 学習課題を蓄積する

校内で実施している協同学習アンケートから、1年間を振り返って、生徒の学習への取組がとても充実したという学習課題(ジャンプの課題)は、ベテラン教員でも1年間1～2個であった。それほど、質の高い課題づくりがいかにかに難しいかということの証左である。それだけに、蓄積される課題は貴重な教育資産である。今後、質の高い学習課題をより多く生徒に提示していくには、それらを計画的に蓄積し、教科の違いを越え、他教科の学習課題も課題づくりの参考にしていくなど、蓄積と活用のための仕組みを整える。

ウ 質の高い学習課題づくりの条件を抽出する

ジャンプ課題は、個人的な学習では乗り越えることのできない、教科書よりも少し難しい内容で、その意味では、学力の上位層も下位層も公平に取り組める課題である。そのようなジャンプの課題を考案するのに必要な条件にどのような事があげられるのか。特に、各教科の特性の差異に着目しながら、生徒の協同的な学びを促すジャンプの課題づくりの諸条件を、年3回の公開校内研究会や日々の実践、協同学習アンケートの結果等を通して、抽出する。

② 「学び合う関係性」を重視する

ア コの字型の机の配置の効果を整理する

お互いの存在を確認でき、意見交流もし易いように、座席配置はコの字型として、その効果と課題を検証する。また、1教室の生徒数が増加する場合、コの字型による効果にどのような影響がでるかを含め、その課題と効果を検証する。

イ 全教員の指導スタンスについて共通理解を図る

教科の特性を考慮しつつ、どの授業も、どの教員も、同じスタンスで「他者とつなげる活動」を取り入れていく。その際、ペア活動を効果的に促す方法にはどのような方法があるのか、また、グループ活動での意見交換を活性化させる教師のケアにはどのようなものがあるのかを、教科の特性を加味しつつ積み重ねた実践から抽出する。

③ 授業の終末の質を重視する

授業終末のいわゆる「学習の振り返り」を重視するのは、学習内容の定着を目的としているが、同時に、学習意欲の継続にも寄与していると考えられる。そこで、その時間に学んだ事を次の学習に生かせる形で終わる学習活動として、どのような終末学習が考えられるか、その手法を模索する。その際、基本的には「自分の言葉で表現する(話す)」、「人に分かるように説明する(語る)」、さらには、それを書いて「記録する(書く)」の3段階の質を仮定し、日々の実践に基づいて整理する。

(2) 協同的な学びにつながる家庭学習のあり方を模索

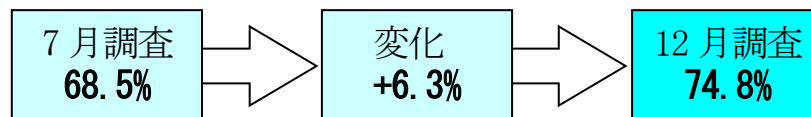
本校は、平日自宅での学習時間が皆無である生徒の割合が全国や県の約2倍(H29 国・県学習状況調査より)に達するなど、家庭での学習状況に改善すべき余地があり、学習内容の定着はもとより、学習意欲の持続にとっても見過ごせない課題となっている。そこで、帰宅後の学習状況の改善に少しでもつながるような課題のあり方を模索する。そのために、発想を転換し、まずは学校での協同的な学びを念頭において、ペアやグループ学習に資する家庭学習のあり方を模索し、協同学習アンケート等でその有用性を考察する。

III 研究実践

☆二段構えの学習課題の取組

1 (生徒アンケート) 授業の課題に興味をもって参加できていますか？

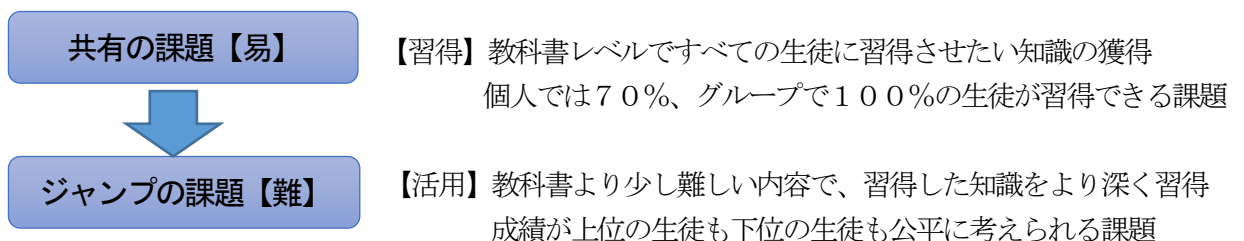
指標 「①はい+②どちらかというとはい」の合計※1



「協同学習アンケート(全学年)」

◇指標の達成に向けた実践と効果

(1) 二段構えの学習課題の設定ポイント



二段構えの学習課題を共通理解して実践するにあたって、全教員が難しいと感じているジャンプ課題については、設定のポイントとして、次の3点を共通理解して実践を行った。

ア 本物(実物)が示せる イ 実社会とのつながりがある ウ 多様な道筋や結論が導き出せるもの

(2) より質の高い学習課題にするために

本取組の結果、年4回の校内研究授業の研究協議結果と「教員アンケート」から、ジャンプの課題を設定するときのポイントとして、さらに次の4点が抽出された。

ア 活用させたい習得的な知識が明確であること

イ どの生徒の生活場面からも想起できる課題内容であること

例：【数学】円の接線の長さを求めよう ⇒ 富士山から見える範囲はどこまでか？

【英語】道案内をしよう ⇒ 地震発生！外国人観光客を避難場所に案内して！

ウ より質の高い知識を「問う」のに適した「問い方」であること

～とは何(WHAT)・～の特徴は(HOW) ⇒ なぜ～か？(WHY)・どれか？(WHICH)

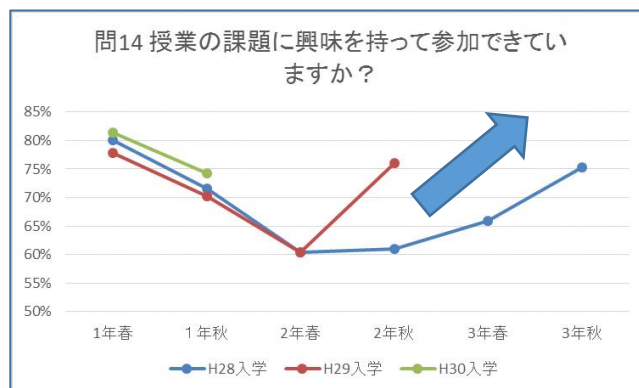
例：【社会】米の品質管理のためにしていること何か？⇒なぜ、米倉の床は高いのか？

エ 挑戦的(挑発的)・創造的課題であること

例：【理科】火成岩を分類しよう ⇒ 火成岩を分類して、分かりやすい名前を付けよ！

(3) 二段階の学習課題の効果

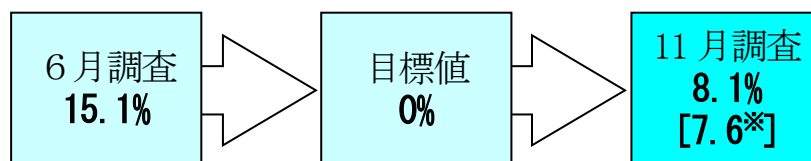
上記の設定ポイントを踏まえて、学習課題を二段階とすることを機会ある毎に確認し合った結果、設定が難しいジャンプ課題については、概ねいつもジャンプの課題まで設定できていると回答した教員は、7月には30%であったが、12月は43.6%と+10.6ポイントも上昇した。それに伴い、2・3年生ともに課題に興味をもって取り組むようになってきた。(右図参照)



☆二段構えの学習課題の効果

1 (生徒質問紙) 授業の内容がどの程度分かりますか？

指標 「④分からないことが多い+⑤ほとんど分からない」の合計



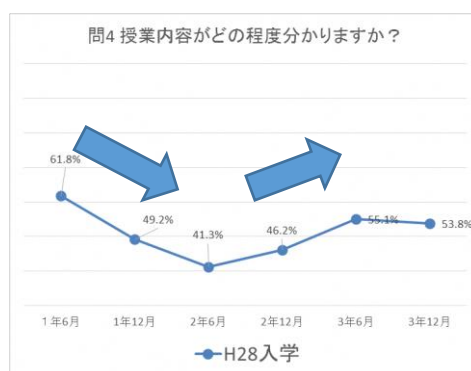
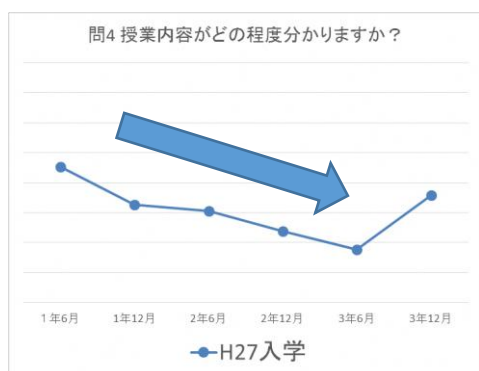
※「協同学習アンケート(全学年)」 但し[]内は、H29. H30 県学習状況調査の生徒質問紙結果

◇指標の達成に向けた実践と効果

(1) 【実践】二段構えの学習課題⇒【効果】「分からない」生徒の減少

本校の研究主課題である「みんながもれなく”学び合う”」授業をめざした授業改善で重視しているものは「生徒の“分からないさ”に寄り添う授業」である。その一方策として、学習課題を「共有の課題」と「ジャンプの課題」の二段構えとなる授業への転換に、全教科で取り組んだ。

その結果、授業内容が「分からない」（「分からないことが多い」「全く分からない」）と回答する生徒の割合は、年内比較(上記)では、この半年で半減させることができた。また、経年比較では、例年、授業内容が「分かる」と回答する生徒が、1年の1学期をピークに学年が進むにつれ減少する傾向にあったが、本取り組みの結果、早い段階で増加に転じさせることができるようになってきた。これは、課題を二段構えとし、全員に習得させたい知識の獲得をめざす学習課題を「共有の課題」として、その目的を明確にした効果と見ている。



(2) 授業改善を活性化のために重視した実践 ～「その授業しなくていいのではないかと問う～」

「共有の課題」については、「全生徒に身につけさせたい知識」を習得させることを意図して課題を設定することを、年度当初の研修のみならず、機会ある毎に確認し合い、全職員で共通理解を図って授業改善に取り組んできた。「共有の課題」を設定するには、教える教員に知識を絞り込む力が必要であり、教師の力量が問われるが、だからこそ「共有の課題」を設定するという作業そのものが、教員の力量の根幹をなす教材感・教科感の確立に寄与し、授業改善をさらに推進すると考えている。

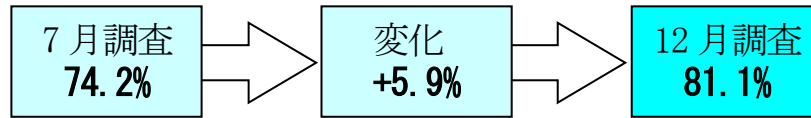
加えて、この実践で特に力を入れたのは、「その授業しなくてもいいのではないかと問う～」と自ら問う習慣の確立である。授業者がこの問いに「いやいや、これは生徒にとって～だから必要なのだ」と答えられるかどうか。知らないうちに「教科書に載っているから」「テストによく出るから」程度の理由で授業を行っている自分気づくことができる。

このように、生徒全員に習得させたい知識を絞り込む力を向上させる訓練として、また、教科の枠を越えてお互いに授業研究を行い合う時のお互い共通の問いとしても、今後もさらに重視したい。

☆学び合う関係性を高める学習の取組

1 (生徒アンケート) 班で話し合う時は積極的に取り組んでいますか？

指標 「①はい+②どちらかというとはい」の合計※¹



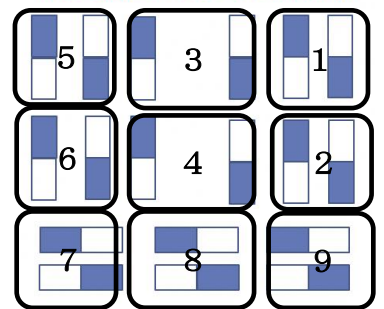
「協同学習アンケート(全学年)」

◇指標の達成に向けた実践と効果

(1) 学び合いの環境作り

- ① 全学級、机の配置をグループ(4人)班をつくりやすいコの字型に統一する。
朝の会から帰りの会まで、一日中コの字型の配置にする。机の片側は何も吊らず、机はぴったりと付けるよう指導する。
- ② 些細なことでも、ペアやグループで確認させる。
開いている教科書のページを確認、忘れ物の確認、小発問の答え確認、短時間の話し合いなど、折に触れペア同士、グループ同士の活動を促す。
- ③ 早めにペアかグループ学習を行う。
早めにグループ学習に入るには、「基礎的な知識を授けてから話し合わそう」という考えから「話し合う中で知識の必要性を感じとらせよう」という考えに発想を転換する必要がある。

机の配置は男女市松模様



▲ 市松模様のコの字型の机

○補足指標[県学習状況調査] 問33「普段の授業で話し合う活動をよく行っていますか？」

(1・2年平均) 本校 93.4% 県平均 84.3% 県平均との差 +9.1 ①「はい」のみの場合 +23.5

(2) 学び合いをより活性化するために

生徒同士が班で自分の意見を述べたくなるようにするにはがより活発なものとなるよう

ア 自分の考えを伝えたいような学習課題を設定する。

生徒同士が話し合う様子を想起して、学習課題を設定する。

イ コミュニケーションツールを活用する。

4人の考えを集約の方向に向かわせることで話し合いの必要性が生じる。そのため、コミュニケーションボードやコミュニケーションシートを班に「1つ」配置して、机上で話し合ったり、試行錯誤したり、班でまとめを行わせる。これらのツールは、黒板に掲示し、考えを共有するツールとしても有効。

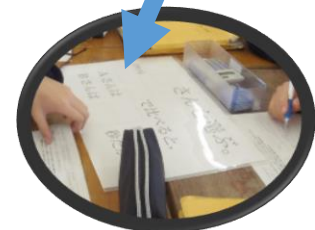
ウ 「きく・つなぐ・もどす」を意識して使用する。

・きく…「～は～と考えているのかな、もっと詳しく教えて」等と個人や班の意見に、さらに説明を求めたりすることで、さらに考えたり、話し合ったりする必要性を生じさせて生徒にもどす。

・つなぐ…「どこが違う(同じ)かな、理由も同じかな」等と意見を比較し、相違点を明確にして、それぞれの根拠や理由の精度を高めるための話し合いの必要性を生じさせて生徒にもどす。

○補足指標 [県学習状況調査H30] 問29「授業では、学級やグループの中で自分たちで課題を立て、その解決に向けて情報を集め、話し合いながら整理して発表する学習活動に取り組んでいますか？」

(1・2年平均) 本校 84.6% 県平均 80.0% 県平均との差 +4.6



▲ コミュニケーションシートの活用

☆学び合う関係性を高める学習の取組の成果

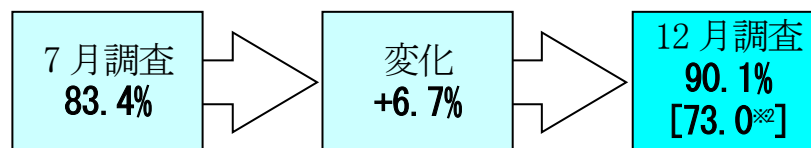
1 (生徒アンケート) 「みんなで学習する」という意識を持って授業に臨んでいますか？

指標 「①はい+②どちらかというとはい」の合計※1



2 (生徒アンケート) 分からないところは友だちに訊(き)くことができますか？

指標 「①はい+②どちらかというとはい」の合計※1



※1 1・2ともに「協同学習アンケート(全学年)」

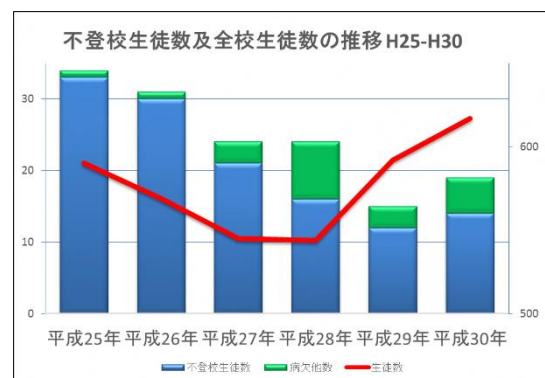
※2 []内は、県学習状況調査の生徒質問紙で類似の設問。但し、県質問紙では1・2年のみ対象で「～教員や友だちに質問して解決していますか？」と「教員」が含まれる設問になっている

◇指標の達成に向けた実践と効果

(1) ひとりも見すてない姿勢

「寝ている子には1分以内に声をかける」ことを全教員の共通行動として、常に確認し合い、実践している。生徒たちに「学び合う関係性」を求める上で、小手先の指導技術よりも、「ひとりも教室からこぼさない」教師自身の姿勢が問われる。生徒は教師を見ている。

突っ伏している生徒に、毎時間、どの教員も声をかける。1日6時間、1年間、「見すてていないよ」というメッセージを積み重ねる。逆に、1日6時間、1年間、放置されていたらどんなメッセージをこの生徒は受け取ることになるか？教室にいる理由を失い、校内を徘徊するか、学校に来なくなるか。教室からこぼれていく方が自然である。本取組みを含め平成25年から取り組んでいる学び合う関係性を高める授業改善が、不登校生徒の抑制に少なからず影響していると考えており、授業改善の効果検証の一つの指標として着目している。



(2) 「訊く力」を高める効果

本校は「みんながもれなく公平に学び合う」授業を目標としている。それには生徒の「分からなさ」に寄り添う姿勢は教師に必要であるが、学習が分からない生徒に本当に寄り添えるのは、教室に1人しかいない教師ではなく、その何十倍もいる”なかま”である。また、課題を背負った生徒を含め、すべての生徒たちに本当に身につけてほしい力は「教えて」と自分から訊く力であり、それが「学ぼうとする意欲」の表れと捉えている。このような理由から、**生徒の学習意欲向上の指標**として最も重要視しているものは、「訊く力」に関係する指標である。

二段構えの学習課題と学び合う関係性を高める取組は、学習意欲向上に少なからず寄与すると考える。

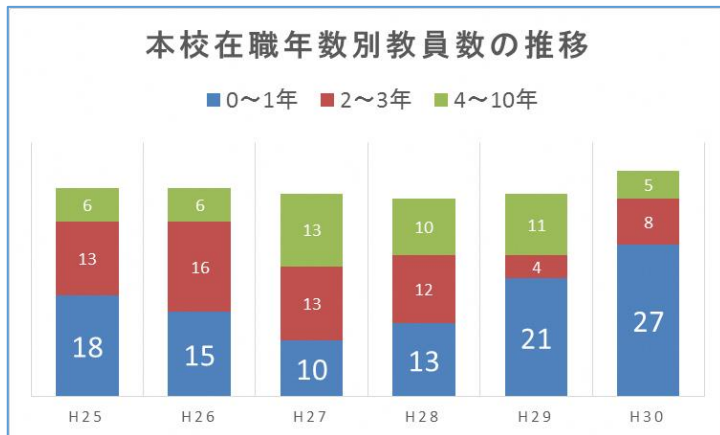
授業改善を続けるための取組(例)

(1) 研究継続を難しくする要因

これまでの取組で明らかな阻害要因は2つある。1つは、教員の変化である。

研究に取り組み始めた最初の1～2年は、教職員のモチベーションを高めることができていても、3年目以降はこの点で困難をきたす。毎年2割程度の教員が異動し、草創期に在籍した教員は半数以下となる。本校は現在、本研究取り組みはじめて6年目、全学年で取り組みはじめて5年目であり、最初にいた教員はほとんどいない。5教科に限れば、もう1人もいないのが現状である。

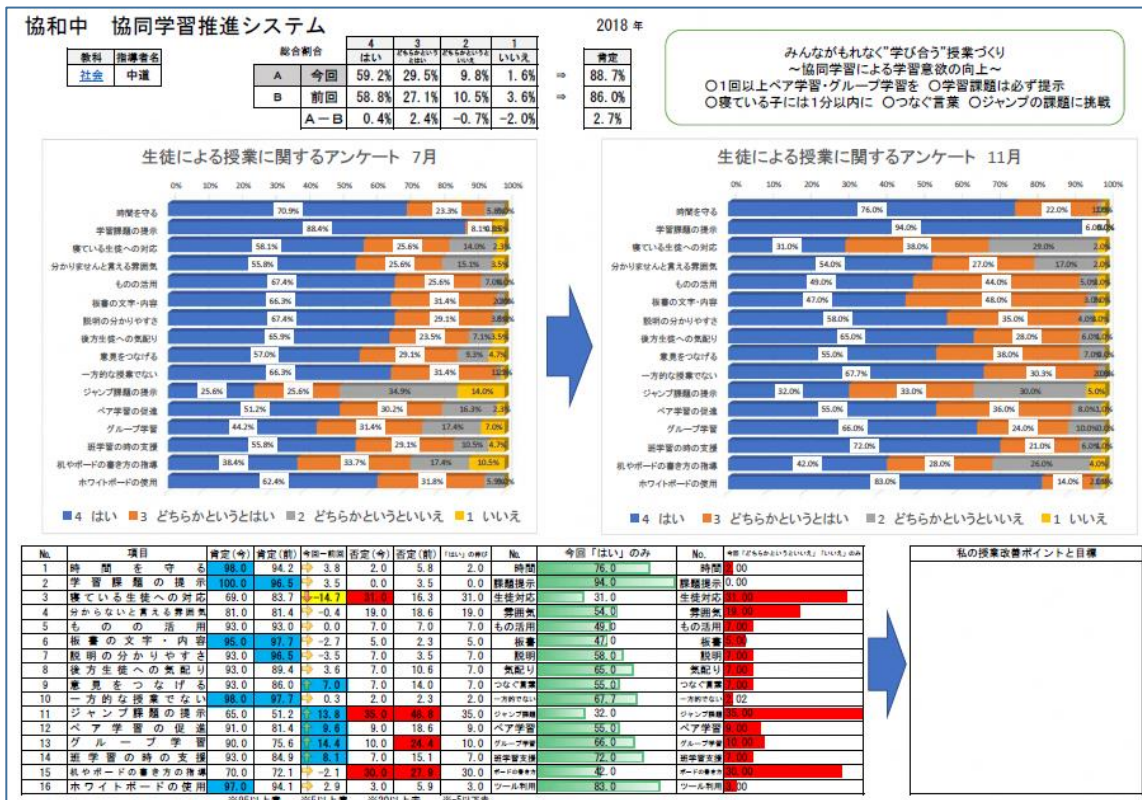
もう1つの要因は、生徒の変化である。本取組の結果、生徒が様々な面で良い方向に変化すると、授業改善に取り組む理由を教員自身が見出しづらくなる。



(2) 生徒による授業評価

阻害要因の影響を踏まえ、授業改善の継続し続けるための方策を本年度、幾つか実践している。その一例が「生徒による授業評価」である。

1学期末と2学期末の2回実施し、その項目に授業改善のポイントを盛り込んでいる。これにより、教員は自己の改善ポイントを数値でとらえることができ、自分の感触と生徒の捉えのズレを認識することにも役立つ。1学期に得た改善ポイントがどれだけ向上或いは減退しているかを明確に捉えることができる。現にその教員の授業を受けている生徒以上によき助言者はいない。



私の授業改善ポイントと目標

IV 研究の成果と課題

(1) 授業の楽しさの質を向上させる効果

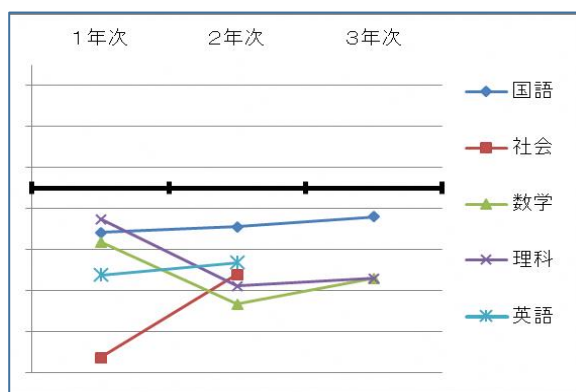
二段階の学習課題設定と学び合う関係性の向上は、どの学年も授業が楽しいと感じる生徒を大きく増加させるには至っていない。しかしながら、ペア学習やグループ学習といった学び合いを活性化させるように学習課題を工夫した結果、グループ学習に積極的に取り組む生徒の割合は増加する傾向にあり、さらに「みんなで勉強しているのだ」という意識も高まりを見せている。つまり、「授業は楽しい」の中身が、「なかまとともに学ぶ」ことが楽しいという方向に質的に変化してきていると解することができる。

(2) 質の高い学習課題の設定から見てきたもの

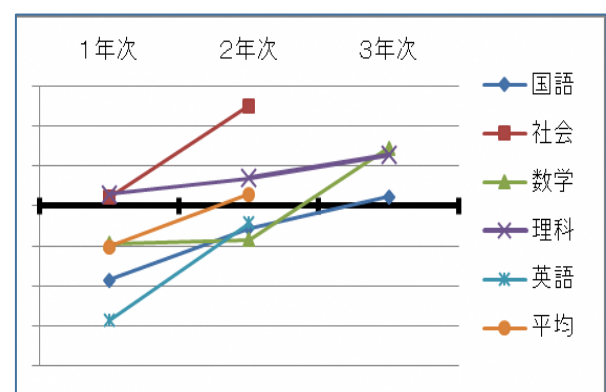
ジャンプの課題の設定は、教師の力量が問われるところであり、この改善を促すことが、教師の力量を高める質の高い研修となっている。実際、「ジャンプの課題に取り組ませるのは教師としても楽しい」と回答した教員は、7月41.7%と半数に満たなかったが、11月には59.0%と+17.3ポイント上昇し、6割の教員が、生徒が生き生きと学び合うことの喜びを実感してきている。

また、ジャンプの課題においても、特に「社会とのつながり」が学力の向上に大きく影響していることが分かってきた。全国学力・学習状況調査の「数学は大切だ」「日常生活に活用できないか考える」「将来役に立つ」と行った社会との関係性を問う設問の肯定率が高い学年ほど、学力は大きく向上している。

平成〇〇年度入学生追跡



平成▲▲年度入学生追跡



32.3

普段の生活に活用

51.9

▲資料：設問「数学の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考えますか」（国質問紙）の肯定的回答（下括弧内数値）と学力状況の県差の経年推移（上グラフ）を照らし合わせたもの

この傾向は、他の各年入学生徒にも同様のことが言える。少なくとも本校では、極めて関係が高い。このことから、今後の授業改善にあたり、特に「社会とのつながり」を意識した授業内容とするにはどういった方法があるのか。また、「普段の生活の中に生かせる」「数学は将来役に立つ」「数学は大切だ」と思えるような授業が展開できる学習課題を核とした授業づくりに力を入れていきたい。

(3) 公開校内研究日 等

第1回 4月19日(木) 非公開・指導者招聘、第2回 6月14日(木) 公開・指導者招聘

第3回 11月21日(水) 公開・指導者招聘、第4回 1月29日(火) 公開・指導者招聘

香川の教育づくり発表会12月27日(木) 於：丸亀アイレックス ほぼ全員で参加し取組発表

※ 公開校内研修会は、午前中の全授業を公開し、午後は研究授業と研究協議を実施した。

※ 第2回からは、小中高連携の一環として、校区の小学校・高等学校にも案内し、来校いただいた。

※ 障害者支援施設やスポーツ団体の指導者も参観していただき、新たな地域連携の一助となった。